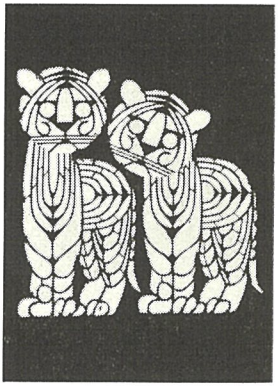

昭和十六年 五月二十七日

絹笠梅二郎

「写真機を御持参でしたら、今頃は豚箱でしょうね」と、たまたま、徳山辺りから乗合わせた、海軍兵学校の御用商人だと称する洋服屋さんは、私の兵学校訪問の失敗談を苦笑しながら聞いて、私の無事を喜んでくれた。萩で一泊して吉田松蔭を偲んだ私は、是非、秋芳洞を見物するようにと、すすめられるままに秋吉へ立寄り、山口、小郡を経由しての帰りである。私たちの列車が宮島駅に着くと、昨日は丁度海軍記念日であったので、兵学校の生徒たちが年中行事の一つとして、ここまでカッター競漕をしたと説明してくれた。道理で兵学校をおとずれた時には、全校生徒はあいにく不在であった。商売柄、海軍将校と同じ生地の紺サージで作ったと思われる、スマートな国民服をまとった洋服屋さんは、呉へ帰るべく海田市で列車を乗換えた。

各方面の学校の視察、見学を命ぜられた私は、江田島では海軍兵学校を見学かたがた、まだ、教官をしている筈の遠縁の者を久しぶりに訪ね、在学中の友人の子息にも親しく会って、激励と慰めの言葉を呈するつもりで、一昨日、呉の旅館に一泊したのである。翌朝早く表通りに面した階下の食堂で箸をとっていると、カタカタと非常に賑やかな音が聞えて来た。かねて噂さに聞いていた、海軍工廠へ通う工員たちの下駄の音である。彼等の通行が静かになった頃を見はからって旅館を出たが、それでも市電は満員であった。そこで、何台目かの電車でようやく江田島行の乗船場、川原石にたどりついた。

この日の予定は兵学校を見学してから、更に広島の高等師範学校やその他の学校を訪問し、三田尻から中国山脈をバスで横断して、山口を経て萩へ出る無理な行程である。萩での主なる目的は、学校の一つとしての松下村塾を見ることであった。時間を有効に使って、出来ることなら余り暗くならないうちに、萩へ到着したかったので、江田島から宇品に出て、広島へ直行することをふと思いついた。汽船の切符売場で、江田島・宇品間の所要時間を何気なく尋ねたところ、売場の女は妙な眼つきで、隣りにひかえた男をちらりと見て、容易に返事をしようとはしない。男も不審そうな顔をして、しばらく私の服装をじろじろ眺めた上で、何故そんなことを聞くのかと問いかえす。旅行の予定をかいつまんで話すと、やっと海上三十分だと教えてくれた。

桟橋の入口に、小銃を持った水兵がいかめしく立っていて、どのような目的で江田島へ行くのかと尋問する。江田島を見に行くのだと答えると、とても変な顔をした。そこで、私は教員であって、兵学校の見学に来たのだと説明したら、どうやら納得したらしく、無事に関門を通してくれた。小型の遊覧船のような船が、桟橋に横づけになっていて、これで江田島の船着き場、小用まで行くのである。早朝の太陽が船を側面から照らすので、ズッ

クの日除けが完全におろしてあった。既に数人の乗客が船内の畳の上に坐りこんでいたが、靴ばきの私は、わざわざ脱ぐのがわずらわしく、入口の土間に立ったままでいることにした。

ふと気がつくと、反対の側にも日除けがおろしてある。上げるのを忘れたのであろうと思いながら、何心なく日除けの隙間からのぞくと、大きな鯨のような潜水艦が、何隻か行儀正しく並んでいる。新らしい軍艦旗が掲げてあって、さわやかな朝風にひらひらしている。艦上を歩く下士官の胸には、勲章がピカピカ光っている。今日は五月二十七日、海軍記念日であることをここで初めて思い出した。明治三十七、八年戦役で、東郷司令長官の率いる連合艦隊が、ロシヤのバルチック艦隊を対島沖で撃滅した日である。間もなく船が出てもよさそうだと思っていると、さっきの水兵が真剣な様子で後を追って来て、今度は、昨夜はどこで泊って、今晩はどこへ行くのだ、写真機を持っていないかと問いつめる。頭の鈍い私はこの時になって、さてはスパイの嫌疑をかけられたらしいと、やっと気がついたのである。

このような目隠しをした船では、早速、靴を脱いでおとなしく船内に入るべきであった。薄ねずみ色の三つ揃いに、同じ色のソフト帽を目深かにかぶり、皮のカバンをさげたあちら姿だけでも、神経過敏の軍港の水兵さんには怪しく見えたに相違ない。その上に長引く日華事変がたたって、食糧事情の思わしくない折柄、私の人相は栄養不良のために、一段とけわしくなっていた。同僚が書いてやろうといった某海軍教授宛の紹介状を、貰っておけばよかったのだが後の祭りである。止むを得ず身分証明書を取出して、弁明これ努めたけれど、うさん臭そうに真物ですかと聞く。証明書を更に証明する証明書の持合わせがないので、さすがの私も途方に暮れて、正直一途の生真面目な水兵の顔をじっと見直した。そこで、更に某教官の親戚である旨を述べ、某生徒にも面会に行くのだと答えたところ、ようやく疑いが晴れたらしかった。とても丁重に挙手の礼をして引上げて行った。

その当時、大和という排水量六万数千噸の超大型戦艦、すなわち武蔵の姉妹艦が呉で建造中であったことを、迂濶な私は近年になって初めて知った。今から思えば、乗船場の至るところに、「スパイ用心」というビラがはってあった。しかも、その年の十二月八日には、突如として真珠湾攻撃が敢行されたのである。琵琶湖の遊覧船にでも乗るような、いとも軽い気持ちで軍港の桟橋をぶらぶらと歩いた、私の滑稽極まる間抜け姿が思い出される。兵学校では当直の古参の水兵が、こころよく校内を隅なく案内してくれた。遠縁の者は久しい無沙汰のうちに、何時の間にか某陸戦隊参謀長を経て、既に某艦隊参謀長に転出していた。まるで牡蠣のように、一つの所にじっとくっ付いている私は、軍部の移動の激しさには、今更のように驚いたものである。

明治二十七、八年戦役で捕獲した清国の軍艦、鎮遠を払い下げて、当時の金で三十数万円の巨費を投じて建てたという花崗岩の大講堂、ここには生徒の座席はなく、全員起立のままである。兵学校出身者の醵金によって出来た教育参考館、この素晴らしい殿堂の正面壇上に取りつけた、今や神格化した東郷元帥の大肖像、その前に恭々しく額づく一生徒を認めた。この日の行事に故あって参加しなかった彼は、徒らに時を過ごすのを恐れて、かくはここに姿を現わしたのであろう。太平洋

戦争勃発と共に製作された国策映画「ハワイ・マレー沖海戦」に、このような印象的な場面があったのを思い起こす。厳しい規律のもと、一般学習のみならず、その他の訓練を受ける映画の場面は、相当に猛烈なものであったが、兵学校の実際のそれとは、到底同日の談でないという。それ程に彼等は鋼鉄の肉体と、それにふさわしい精神とを要求された。真珠湾の奇襲作戦、さては、マレー沖での英国戦艦プリンス・オブ・ウェールズ号撃沈のこの記録映画は、当時、われわれを盲目的に戦争へと駆り立てたものである。

日本民族の遺香が溢れ、勝海舟以来の日本海軍の伝統を誇る教育参考館、そこで、たまたま見た数多い品々の中、兵学校出身の歴代戦没者の芳名を記した、モロッコ皮上製本のNEDのような、ずらりと並んだ豪華な大冊、上海事変で無数の敵弾を浴びながらも、辛うじて帰還するや否や、搭乗者は絶命したという下駄穿き機、小さな愛らしい容器に納めた、トラファルガル沖海戦の勇士、英国水師提督ネルソンの金色巻毛の遺髪……これ等のものは特に私の心を捉えたものである。英国のダートマス、独逸のフレンスブルグ、米国のアナポリスなどの兵学校に比して、今や遜色のない江田島ながら、かねて、英国海軍の様式を採用、踏襲したここに、ネルソンの遺髪を発見したのは、まことに尤もと興味深いことであった。これらを始めとして数々の記念品は、その後、果してどうなったことであろう。近くは特攻隊員として空しく散華した、若い人たちの遺墨、遺品が加えられたと聞く。一度戦いに敗れたからには、やがて、彼等の名は淋しく消えて行くのであろうか。

生徒館の自修室や寝室の整理、整頓、清潔振りは、かねて、しばしば聞かされた通りであった。正に一糸乱れぬ見事さである。ところが、コンクリートの階段の、その踏段の正面や側面に、駈足の靴を突きあてるいはかすりつけて、靴墨の黒い跡が至るところに点々と、まことに見苦しく残っているのには、何んだか心が暗くなる思いをした。帝国海軍の余りにも果敢ない焦躁を、図らずもここに見出だしたのである。今にも太平洋戦争に突入しようとするこの時に、兵学校の水洗便所は、不幸にも水洗式の機能を失なっていた。苛烈な日華事変の進展につれて、残念ながら万事は不足、不自由を告げていた。酒倉からでも運んで来たような、大きな木製の水槽を備えて、とに角、彼等は用を足していた。私はここにも間もなく崩壊しようとする、巨大な海軍の悲しい運命の幻影を、心ならずも認めたような気がしたのである。

その後、友人の子息は、果敢且つ有能な飛行将校として活躍していたが、終戦間近かの頃、九州の大村湾基地から沖縄方面へ出撃したまま、遂に消息を絶つことになった。「戦いは死ぬのが目的でない。何んとかして無事に帰って来い」これは何時も彼と出合うたびに、私が言って聞かせた言葉である。幾度か九死に一生を得ては、また勇躍、各地に転戦したのであるが、終戦を待たないで、惜しいことに不帰の客となってしまった。軍港を守る熱心さの余り、私にスパイの嫌疑をかけた、乗船場の単純で正直な人々、特にあの若々しかった純真な水兵さんは、果して今もなお健在であろうか。職務に対してまことに忠実であった、彼のりりしい軍服姿が、幾歳月を経た今日、まざまざと私のまぶたになつかしく浮んでくる。

（経済学部教授・英語）